

双

子

の

糸

の

物

語

コッコ文庫



双子の糸の物語

三十六年前、ここからはるか遠くのスコットランドでわたしたちは生まれた。人間にとっての三十六年前は、それほど昔ではないかもしれない。でも、わたしたちの時間は人間とは違う。そうね、犬に似ているといえればよいかしら。

まず羊の姉さまが生まれた。その刈られた毛がわたしたち。

そう、わたしたちは羊なのです。三十六年前に羊として生を受け、その一年後に成人して毛糸になりました。優しく、いつも眠たげな睫毛が素敵な姉さまとは、わずか一年しか一緒にいられなかった。もっと一緒に、潮とウィスキーの風を感じながら牧草地を揺蕩いたかった。けれど、牧場のご主人は几帳面で羊たちの健康を考えてくれる人だったから、みんな生後一年で姉、兄たちから刈り取られ独り立ちしなくてはならなかった。

刈られる前の夕べ、姉さまに風が恋しいと泣きごとを言う、「随分大人びているのね。潮とウィスキーの風だなんて」と微笑み、「旅をなさい。どこまでも遠くへ旅をするの」とわたしの暖かさをいつまでも愛しんでくれた。独り立ちがどれほどこわかったか。

けれどわたしは幸運だった。

姉さまから刈り取られた毛は、紡がれると二つの糸玉に分かれた。ひとつは雲の柔らかな白色、もうひとつは黄みがかった日向ぼっこする林檎の赤色に染められた。だから「わたしたち」成人した日は、わたしたち双子の糸の誕生日でもあった。わたしが雲で、妹は林檎よ。

そんなわたしたちも人間の倍以上の速度で年をとってしまふから、気がつくとうに七十歳を越え、妹は二日前に最後の目的地へと旅立ってしまった。さみしいけれど、本当なら赤と白、別々の毛糸として、出会ってすぐに離ればなれになるはずだったのに、偶然かそれとも双子のテレパシーというやつなのか、わたしたちはその後も一緒に旅することができた。だから幸せなもの。

どうしてかしら、今日はやけにこれまでの旅路を思い出してしまう。

わたしたちはスコットランドの小さな工場で毛糸玉になった後、数か月のロンドン滞在を経て、はるばる海を渡った。なんと着いた先は日本。東京のとある手芸店に納品され、色が違うからと木製の棚の一番上と三段目に並べられた。夜になると、「次はどんなところへ行くのかしら」とか、「今日は危なかったわね」「ほんとだよ。床に落としたくせに、埃を払ってくれない人と一緒に行くのはごめんだよ」とか、「お客さんが少ないね」「だってみんな半袖だもの」といつもふたりお喋りをして、必ず最後にどちらかが「でも、もうちょっとこのお店にいるのもいいよね」そう言ってまた夢のなかへ戻るのだった。

商店街のはずれにある小さなお店は木造の二階建てで、古い木の階段は誰かが上ってくるとぎしっと軋む。わたしたちがいるのは二階だったから、その度にとんな人がやってくるのかと

きつとした。屋根裏に似た雰囲気があり、蔦が這う窓から射すお日さまは、ときどき床に緩やかな波を描いた。まどろむ午後、輝く波と羊小屋それから豊かな睫毛がどこからともなく立ち現れ、わたしは胸がぎゅっとして目を覚ますことがあった。

お店は、「手芸店なのに暗い」らしく、たまに「品物が全然見えないわよ」と文句を言う人があった。店主が「あちらは照明が明るいですよ。それにぜひ、外の光の下での見え方も確かめてみてください。それを持って外へ出ていただいて構いませんから。結構、印象違いますよ」と微笑むと、一瞬驚いても「そうね」と笑顔になる人と、品物を雑に戻して店から出て行く人々と別れた。不満げな客がいなくなると店主はきまって鼻歌を歌った。そして、わたしたちのラベル（それはスコットランドで誂えられたロゴが素敵な一^{ラベル}張羅）が少しでもずれているのに気がつくのと、すぐにびしっと直してくれた。わたしたちはそんな店主を気に入っていた。

とはいえ、店主もわたしたちも、店内の毛糸や布と同じでお客さんが十人十色であることはよく理解していた。陳列棚を乱暴にかき回す人が売り上げに貢献することもある。毛糸は人間の手でマフラーやセーターに転生されることが使命であって、主の決定権^{あるじ}などもたない。できることといえば、大切に扱ってほしい、喜んでほしいと願うことくらいで、主が決まればしなやかに動き、人間の生活をあたたく彩ることに励む。直接人間に話しかけられないからこそ、わたしたちは「使命を全うします。だから、喜んでくれる人、できることなら優しいひとの

とへ行きたいのです」そう強く願った。

その結果、思いはどこかへ届いたらしかった。「ああ、この人の手で生かされるのだ」と嬉しくなったのは、その高齢のご婦人がシアサッকারワンピースを着ているにもかかわらず、わたしたちを求めてくれたからだった。夏から毛糸を欲しがるなんて、よほど編むのが好きなのでしょう。その人は曲がった腰でえっちらおっちら階段を上つてくると、萎んでいた顔をたちまち明るくして、「まあかわいい赤の子ね」と妹に話しかけた。ご婦人はさっそく妹をかごに入れると、今後はずらりと並ぶ色とりどりの毛糸たちを一番上の段から順番に目で追った。それから、わたしやベージュ、明るめの灰色の毛糸を吟味した。自分も候補に入っていると分つて、心のなか「双子ですもの、赤の子にぴったりです」と強く、呟いた。

声に出しても、出さなくても、どちらでも構わない。ただし、自分の気持を素直に言葉にすることは大切だとこのとき知った。なぜなら、彼女はわたしを選んでくれたから。他にいくつも買い込んでいたもの、決してわたしたちだけをより好んだわけではない。それこそ双子がなせる妙だったのかもしれないけれど、わたしは今でも言葉にしたからこそ、彼女と目が合い、思いが通じたのだと思っている。

紙袋のなか、彼女が歩くリズムに合わせて赤色の妹と隣り合わせになると、なんだかくすぐったくて嬉しかった。

高齢のご主人はほどなくして病に倒れた。わたしたちの一部は靴下やショールに転生して、冷える彼女の身体を温めた。けれど彼女は逝ってしまった。

小さな糸玉となったわたしたちは、それから長いこと人間に触れられることなく、アケビのかごの中で眠った。彼女の後継者はすぐには現れなかったのね。その間、大掃除や探し物といったなにかの拍子に起こされては、時代のうつり変わりを人間が見つめるテレビやインターネット、それを取り巻く家の人たちの様子から知った。

転生されることが使命だからといって、毛糸玉は常に目まぐるしく編まれているわけじゃない。じっとしている時間は長いし、突然切れ端になる運命だってある。旅と同じ。四六時中冒險しているわけじゃない。目的地変更。行き止まりと折り返し。嵐のため欠航。それこそ、わたしたちにお決まりなのは中弛み。^{なかだる}たとえご主人が、十二月までに白いマフラーをと張り切っても、なぜかあと数段のところまで停滞したり、結晶の柄ひとつを直そうとしてそのままになったり……。だから、これから旅に出る糸玉がいたらこう教えてあげたい。使命を待つ。ときは来たれりで動く。手がストップしたら待つ。待てど暮らせど動きがないときは、寝る。そうやって、ゆるくだらーんと弛んだり、^{たろ}撓んだり、^{たわ}ぎゅっと巻き込まれたり、わたしたちは一筋の糸だけれど、仕事は一筋縄にはいかない。だから待つことをおそれない。

そんな状況が、人間の時間で五、六年、わたしたちにとっては十五年近く続いたある日、ご主人の孫の瑠衣さんが引越してきた。瑠衣さんはご主人のお子さん、つまりご両親と同居することになったの。瑠衣さんはお祖母さん譲りのニッターで、わたしたちは久しぶりに編み針たちと再会した。色とりどりの毛糸玉でいっぱいのかごを手にした時の笑顔はお祖母さんとそっくりだった。「今度は彼女の手で生まれ変わるのね」と、わたしは彼女の弾力ある指先に絡まるのをワクワクした。

けれどすぐに恥じた。小さすぎて生まれ変わることができないわたしたちは、他の糸たちが動き出すのが羨ましくて、自分たちはなんてはじめなのだろうと縮こまってしまったの。瑠衣さんの技量なら短い糸を繋げて編むことは簡単だった。それでも、わたしたちは編み続けるにはあまりに短すぎた。鎖編みで四十目編めるかどうかだから使い物にならない。妹とわたしを繋げて、四十目を二段がやっとなあ、もう寿命だと思った。

そんなわたしたちをいつまでもかごの中に置いてくれたのは、祖母と孫の編み物に纏わる思い出、それから、わたしたちがどんなに小さくなってもお祖母さんが長年捨てずに保管してくれていた“*Spun in Scotland*”と書かれた一張羅のおかげだった。スコットランド製の毛糸は質が良いと瑠衣さんは褒めてくれたっけ。シャイな妹はきつと顔を赤らめていたのだと思うけれど、なにしろ赤いでしょう。本当のところはわからない。

不貞腐れてかごの隅っこにいたわたしたちに、ある春の日、転機が訪れた。

瑠衣さんの姪っ子たちが御殿場から遊びに来て家中にぎやかだった。とりわけ元気だったのが当時八歳の紗奈きな。たまに遊びに来ることはあったけれど、逆立ちしたり側転したりと活発な子だったから、仲良くなるなんて思いもしなかった。それなのにわたしたちは紗奈と一緒に次の旅に出ることになった。

大人がお喋りするかたわらで紗奈は流行りのダンスを披露して、瑠衣さんが片手間にスマホで撮影していた。得意気にボーイングをして、今度はおやつをねだるのかと思ったら、スマホを持つ瑠衣さんをのぞき込んでこう尋ねた。

「瑠衣ちゃん、あやとりできる？」

紗奈は瑠衣さんが編み物の達人だと知っていたわ。けれど教えてほしいのは編み物ではなく、あやとり。わたしたちの故郷にもあるけれど、今の子供たちが好む遊びではない。さっきまでダンスしていた子があやとり……。しかも東京タワーを作りたいと言うじゃない。瑠衣さんも「え、あやとり？ どうしたの、いきなり古風ね」と怪訝な顔をしてわたしたちが入ったかごを棚から取り出し、そっとテーブルに置いた。そして緑色のアクリル毛糸に狙いを定めると、適当な長さで切り、端と端とを結んで輪にした。

「子供の頃に遊んだきりだなあ。東京タワーは作ったことない気がするよ」

瑠衣さんは困った顔をしてネットを調べた。すぐにお目当ての動画が見つかったらしく、瑠衣さんはスマホを見ながら手首を捻って首も捻ること数回、器用なだけあってあっという間に綺麗な二等辺三角形をマスターした。

紗奈も真似てみるけれどなかなか成功しない。瑠衣さんの手元を瞬きするのも忘れて凝視するのだけれど、どの糸を^{すく}揃えばよいのかわからなくなってしまう。スマホの動画を途中で止めてみたり再生速度を遅くしたりして、瑠衣さんと画面とを見比べながら何度もチャレンジした。紗奈の兄弟は初めこそ物珍しさに黙って見入っていたものの、飽きたのか二階へと行ってしまった。「細かいところを見るのに動画って便利よね」と感心している大人たちに囲まれ、床に座り込み前のめりになって悪戦苦闘している紗奈を、わたしたちはテーブルの上から高みの見物と決め込んだ。

十分、二十分と時間が経って、「そろそろ音を上げるかな」なんて意地悪な声も聞こえてきた。それに奮起したのか、捻じれ気味の東京タワーが出来上がった。が、紗奈はそれをすぐに解^{ほど}いて再挑戦した。

いつの間にか、瑠衣さん以外の大人は別の話題に、二階から降りてきた子供たちはおやつのおットケーキに夢中になっていた。けれど紗奈の集中力は目を見張るもので、メイプルシロップの誘惑に負けることなく、ついには東京タワーをマスターした。

みんな拍手して褒めているのに紗奈の第一声は、

「でも、これ、タワーっていうよりクリスマスツリーのみたい」

そんな紗奈の手のなか、ようやく二等辺三角形に変身できた緑の糸はげっそりして、「もう、うんざりだよ。目が回って吐きそう」とわたしたちに横目で訴えた。

妹がわたしにぶつかってきたのは、そんな緑の様子が可笑しくて笑い転げているからだと思った。

ところが違った。妹は紗奈の言葉に、(クリスマスツリー、クリスマスといえど緑に赤)と連想してしまったんですって。それで次は自分の番になるに達しないと逃げていたのよ。実は妹はポンポンにされるのが大嫌い。冬のニット帽のてっぺんについているような丸いポンポンね。若い頃から「恥ずかしい、あー恥ずかしい」とうるさかった。けれど「今は春だもの、クリスマス飾りだなんて」と笑うわたしに妹はこう囁いた。

「危機感がないな。お姉ちゃんも同じだよ。雪は白いでしょ。いいように使われるよ」

瑠衣さんは、紗奈が作った緑の「東京タワー」を崩さないようにそっと受け取ると、時間をかけて品定めた。次に油性の黒いマーカーでいくつか印をつけてから、輪に戻した。すると再びタワーをつくって、タワーの色々なところを定規で測ると、数字をメモした。タワーをつくる。測る。メモする。それを繰り返した。

わたしは高みの見物だなんて調子に乗っていたのを後悔した。これは怪しい呪いだ。どこだつたかしら、確かオセアニアでおこなわれるという秘術だか呪術よ。間違いない。慌てふためくわたしたちの上に、瑠衣さんの手がのびてきて妹を掴んだ。

「やっぱり赤いボンボンにされるの？」

と喚き、「あんな辱めはごめんだ」と訴える妹にわたしは苛立った。（違う。クリスマスなんて関係ないの。これは呪いよ！）そう叫びそうになったけれど、不安を煽ってはいけなさと堪えた。すると今度はわたしが持ち上げられた。端を引っ張られ、残り僅かな命を弄ばれる。行く末もちろんだけれど、自分のあまりの短さにも泣けてきた。隣では妹が泣きじゃくって私を見ている。息も絶え絶えなわたしたちを知ってか知らずか、瑠衣さんは、緑と同じようにわたしに定規をあてがうと、なんと次に向けたのは鋏！

気が遠くなり、再び意識が戻ったとき、私はすでに切られてしまっていた。ただでさえ短くなっていたというのに、瑠衣さんはどうしてこんな所業ができるのだろう。お祖母さんとの思い出は一体なんだったの……。けれど嘆く暇もなく、今度は妹が刃を向けられていた。成す術がないわたしはただ見上げるばかり。妹は目を腫らしても赤いからわからないし、わたしも気絶しそうになったところでもいつも顔面蒼白。なんて冴えない姉妹なのと、このときばかりは自慢の色を呪った。緑の糸も、繰り返し変身させられた後の伸びきっていた様子からは一転、間

の抜けた黒いボーダーを不本意に着せられて縮こまり怯えていた。

実はこのとき、わたしたちは東京タワーがどんなものなのかを知らずにいた。普段わたしたちはテレビの向かいにある棚のなか、布を掛けられたかごの中で過ごしていた。たまたま、薄っすら見えるテレビに映った白っぽいスカイツリーのこととは知っていたけれど、東京タワーはたまに名前を聞く程度。あやとりの動画だって、スマホを食い入るように見つめる紗奈の頭で見えていなかった。

だから瑠衣さんが、短くなったわたしと妹を結んで一つの輪にしても、何が起きているのかさっぱりだった。

「え、すごっ。これならタワーっぽくなるの？ 瑠衣ちゃんやってみて！」
はしゃぐ紗奈の様子に、先にピンときたのは妹だった。

「あ、わたしたち、タワーになるんだ」

瑠衣さんの両手に絡まり、掬いとられ、わたしたちは「東京タワー」へと変身した。

「赤と白がいい感じで配色されてる」

「すごい」

みんなが盛り上がるなか、紗奈はわたしたちをじっと見つめていた。気恥ずかしくて横を向くと妹と目が合った。突如として常に隣同士、ひとつの輪となった気まぐさから、わたしたち

は互いに顔を背けた。

瑠衣さんが紗奈の小さな手に合うようにわたしたちの位置を微調整している間、どうしてわたしたちが東京タワーになるとわかったのかと妹に尋ねてみた。

「日本の国旗は赤と白だから、タワーもその色かなと思った」

クリスマスカラーだなんてはやとちりもいいところ、とからかってやろうと思っていたのに、呪いだとうろたえたわたしの方がよほど滑稽だった。

瑠衣さんから赤と白の双子糸でできた輪をプレゼントされると、紗奈は瞳を輝かせた。

こうしてわたしたちは命拾いし、紗奈が新しいご主人になった。

けれどすぐ不安になった。いくら幼いとはいえ、新しいご主人はあまりに夢見がちだと思ったのよ。だって家へ帰る途中、首都高を走る車のなか外を眺めて「東京タワーってほんとにこんなにいっぱいあるんだね」なんて言うのよ。（何言ってるの。東京タワーはひとつでしよう）家族に代わって、わたしがそう言いたかったくらい。スコットランド生まれの、それがどんな姿をしているか知らなかったわたしたちだって、東京タワーは一つしかないことくらいは知っている。仮にわたしたち毛糸のタワーを入れたとしても、二つ。それなのに家族は誰も正そうとしなかった。紗奈はわたしたちでタワーをつくっては解き、つくってはほどきを繰り返し、頻繁に車窓を眺めた。コンクリートジャングルというだけあって無機質な壁のむこうには建築

中の高い建物があちこちにのぞいていた。

「紗奈の表現もあながち間違っていないのよね」

呟いたのは母親だった。

「あっちにもこっちにも、高いクレーン車が見える。東京タワーみたいな色してね」

それでわたしたちは気がついたの。紗奈が「東京タワー」と言っているものは別のもの。とてもなく高いところにあるクレーン、高さの目印として赤と白で七等分にカラーリングされた、タワークレーンのことを言っているのだった。

紗奈は車のなか大きな声で言った。

「わたしあれに乗りたい。高いところでクレーン車を動かしたい。新しいタワーをつくりたい」

「東京タワー」に憧れ続けた少女はその夢を叶えた。建設業界に入って六年目のことだった。一度諦めかけたことがあったけれど、小さな箱にしまい込んでいたわたしたちを引っ張り出して「東京タワー」に変身させると、再びタワークレーンの操縦席を目指して、あの日とは比べものにならない挑戦を繰り返した。誰かに相談するでも、泣き言をいうでもなく、わたしにしたらちょっとしおらしさが足りないように思われる紗奈が選んだ相談相手は、ものを言わないわたしたちだった。国家資格に受かるまでの勉強時間や仕事の空き時間を使っての特訓回数を

積み上げたところで、三三三メートルになんて到底届かない。そんな途方もない高さが紗奈には魅力だったのかもしれない。大人になった彼女の手で作られる「東京タワー」は、微妙に赤と白のバランスが崩れてしまった。紗奈はそんなわたしたちを見ては笑った。

紗奈が正式にタワークレーンオペレーターとしてクレーン車に昇った日、彼女はわたしたちをズボンのポケットに滑り込ませ、操縦席からの景色を見せてくれた。圧倒された。高さではなく孤独に。妹もいる。紗奈もいる。操縦席に守られてもいる。それなのに空のなか自分だけがぼつんと、時間が消えた世界にいた。遠くまで見渡せるのに、世界のすべてがここにあって、ここにしか世界がないような孤独を感じた。けれどそこで働くということは様々な厳しい現実を伴っていて、そのおかげでわたしは孤独に引き込まれることがなく済んだ。

ところで、クレーン車の操縦席、それもタワークレーン車と言われても、あまりピンとこないでしょう。だからこんな想像をしてみてもいい。

一本の木がある。その木の高さは百メートル（そんな高さの木、セコイアしか存在しないらしい）。その緑の枝葉のてっぺんに操縦席がある。つまり操縦席は地上百メートルの高さにある。操縦席を支える幹は金属でできた強固な柱。クレーン車を動かすためには、もちろんてっぺんに昇らなきゃならない。でも木登りというわけにはいかないから、柱の内側にあるはしごを昇って頂上を目指し、地上へ戻るときは当然それを降る。

百メートルの木にほぼ毎日、昇っては降りる。朝は早く、まず点検から始まるから気が抜けない。近くの足場には他の作業員がいて、無線でやりとりする。けれど操縦レバーを握るのは紗奈。一人きりの操縦室は二平米にも満たない。お手洗いも設置されているけれど、きれいなオフィスと比べるのは酷というものの。

それに、実は地上百メートルは序の口だった。クレーン車は建設中のビルの十階に設置されることもある。十階は地上から約三〇メートル。その上に高さ百メートルのクレーン車とそれを支える柱がある。ということは、地上からの高さも含めると操縦席ていせんは地上一三〇メートルに位置することになる。百も百三十もそれほど変わらない？ 数字だけならそうかもしれない。仮でも身長一六〇cmの紗奈と一九〇cmのファッションモデルならまるで高さが違うじゃない。仮に三〇メートルまではエレベーターがあつたとしても、そこから百メートルも高い所、そこで仕事できる自信なんてわたしにはない。

紗奈が建設業界に入って六年目にしてたどり着いたのは、そういう場所だった。必要なのはおらしさではない。他人の言葉より幼い頃の自分を信じるくらいの無謀さと強さをもっていないと、そこまで昇られるわけがない。わたしたちは彼女の大胆さと勇敢さに恐れ入った。

それからというもの、紗奈とわたしたちはいつも一緒だった。この仕事は、ほかの作業工程が完了するまで待機したり、風の強さによっては一旦地上へ引き返したりと待つことが多い。

そんなとき気が向くと紗奈はバッグに忍ばせているわたしたちで遊んでくれた。相手をしてくれるのはほんのたまにだったけれど、紗奈が大人になったようにわたしたちも彼女の約二倍の速さで年を重ねていたから、アクロバティックな変身は気まぐれなくらいでちょうどよかった。

ホテル、オフィスビルと経験を積み、しばらく経つとタワーマンションの現場が多くなった。建設会社も男社会ではいられなくなり、紗奈にも後輩ができたほど、免許とやる気があればチャンスをつかめる職場に変わっていった。高さに抵抗がないことは当然として、一人で作業を担うプレッシャーと、操縦席という小さな空間に自分だけという孤独を厭わなければ、少なくとも紗奈にとってはぴったりの仕事だった。話術で仕事を進めるのは苦手でも、集中力には自信があった。事務所で打ち合わせや若干の事務作業もあるから、きれいに切り分けられる訳ではない。でも、高所は仕事、地上に降りればプライベートと気分を切り替えやすいのも魅力だった。逆立ちや側転が得意だった紗奈は体幹が強いのもかもしれない。一人という身軽さと高所で頼られるのは自分だけという重圧、空中と地上、その中央でバランスをとることに長けていたように思う。彼女は休日になると決まってネイルの色を変え、ラインストーンで新しい模様を描いた。お気に入りにはピンクのラメが入ったグレーのネイルに、シルバーの極小のストーンを並べる。均等に貼るのが上手だった。あれもバランス感覚が物を言うのかしら。そういえば、一七歳のとき自分で開けたピアスの穴も左右びったり位置が合っていた。

颯爽とクレーン車を動かしていた紗奈だったけれど、地上一〇〇メートルへたどり着いて三年目を迎えた頃、休日のネイルタイムが消えてしまった。人さし指のネイルが剥けても、片方のラインストーンが欠けても直さない。しばらくするとネイルを一切しなくなった。綺麗な小瓶が放つ臭いにいつまでも慣れなかったわたしたちはそれを歓迎した反面、心配した。「今度は四十階建てのタワマンだよ」とワクワクしていた声は、「タワマン建てたところで自分は住めないよね。住みたいとは思わないけど」とぶっきらぼうな口調になった。完成したマンションを見上げていると思ったら急降下してうつむいて歩き出すこともあったし、給与明細の画面を溜息交じりに睨んだり、それまでなら聞き流せていた、ときどき無線に流れてくるおじさんたちのくだらないお喋りが気に障って喧嘩までした。憧れの職業に就いたからといって中弛みしないわけがないし、当然疲れもストレスもあったでしょう。帰宅後ベッドに倒れ込んで、赤ちゃんのようにまるまって朝を迎えてしまうことや、帰省すると両親や兄弟に「高い所で仕事すればするほど、地上から見れば点でしかない」と捻くれた表情を見せることもあった。

あるとき、彼女はテレビをつけた。きつと目的もなく。映ったのは日本各地の素敵なお家を訪問する隠れた長寿番組だった。実はかつてのご主人がこの番組を流しながら編み物をするのが好きだったの。和風、洋風、木にコンクリート、平屋に三階建て。さながら旅よね。この日登場したのは、ある建築士が自分のために建てた家だった。

わたしは久しぶりの番組に喜んで、「あの頃も何軒も登場したわよね、建築士がつくった自分の家」なんて夢中になっていると、そんなことより紗奈を見ろと妹につつかれた。見ると紗奈は自分でテレビをつけたくせに興味がないのかぼーっとしている。ところが、建築士が「自分で設計しても、自分が思い描いたように家が届けられているのか、分からなくなってきたんです。」と語りはじめると、目つきを変えてテレビへ顔を向けた。

「一種の自信喪失ですよ。設計しても、どうにも響かない。いや、お客様には喜んでいただけるんです。でも、自分に響かない。なんでだろうと考えても分からない。それで身をもって感じてみよう。ぼくがつくった家は住む人にどう届いているのか、体感する必要があるんじゃないか。そう思い立って、この家をつくりました」

紗奈は建築士が話し終えるとテレビを消した。（あら、肝心のお家は見せてもらえないのね）と少しがっかりしたけれど、こうも思った。もしかしたら紗奈も同じような疑問を抱いているのかもしれない。憧れの職に就き、どんなに高い建物をつくっても、誰かのためである以上、つくったというだけでは手応えのようなものがないのかもしれない。自分の気持と完成したものにギャップを感じることや、自分の仕事がないを届けているのか、見失いかけていたりするのもかもしれない。紗奈は好んでタワーマンションをつくらせているわけではない。それはわたしたち毛糸だって同じ。けれど、魅力的なご主人たちにめぐり合えて、素敵な物に転生や変身し

てきたわたしたちは、紗奈が抱える葛藤とは無縁だったのかもしれない。珍しく、いつまでも頼杖をついている紗奈を見ると、そんな気がした。

それでもめげずに昇り続けた紗奈だったけれど、その一年後、ある一言で地上に叩き落とされた。

その日は風が強く紗奈は早々に地上に引き返した。午後には横殴りの雨まで降ってきて他の作業も延期になった。ちょうど会社の飲み会が予定されていたのも手伝って、少し早めに仕事を切り上げ、みんなでお店へ向かったの。わたしたちは紗奈の左手に巻かれていた。

実はその日の朝、池袋の雑居ビルで火事があった。すぐ鎮火されると思いきや強風にあおられ火の手は激しく、近隣の人たちも避難する大騒ぎになった。その頃、わたしたちはクレーン車のなかだった。紗奈は火事にはさほど関心がないようだったけれど、風で操縦室が揺れる度びくっとして辺りを見回したり、無線で地上とやりとりして状況をうかがったりしていた。火の手に敏感なわたしたちは遠くに流れる灰色の煙が気になって仕方がなかった。飲み会が始まると、一人のパートさんがこの火事の話をした。ちょうど通勤途中で山手線に乗っていて、消防車が騒がしいとは思ったけれどまさかそんなに大きな火事だとは思わなかったそうよ。紗奈は風でガタガタ揺れて怖かったと相槌を打った。そこからタワークレーンの話になった。よくあんな高いところに一人でいられるなと感心する声もあれば、待機時間が多いから楽でしょと

からかう人もいて、お酒も入っていたからみんなにぎやかにお喋りしていた。

すると隣の席のサラリーマンが、「みなさんタワークレーン動かしてるんですか？」と寄ってきた。近くにいたクレーンオペレーターの先輩が「そうなの俺ら。すごいでしょ」と紗奈や他の社員を示して胸を張った。けれど紗奈は愛想笑いをした程度で、鶏の照り焼きにポテトサラダをつけてもぐもぐ。

「すごいな。あんな高いところで仕事するなんて。これからは宇宙ビジネスがどんどん進みますから、今までにないものをつくるチャンスも出てきますよ。宇宙港の建設とか、どうですか」
どうやら彼らは職場の研修で宇宙保険のことを聞きかじったばかりの保険会社ご一行様だったらしい。

「どうよ、松田？ 宇宙だって。稼げるかもしれないよ」

「興味ないです。遠すぎますもん」

「え、宇宙は果てしないって？ まあ、敷居高そうだけど、なにもNASAで仕事するわけじゃないんですよ。東京でマンションつくり続けるより夢があるかもよ」

「そうかなあ」

紗奈は首を傾げると、離れたところに置かれた一味唐辛子へ手を伸ばしたところで、なにか思いついたようだった。

「先輩、こんなふうに手が届くのがクレーンの魅力なんです。これくらいの距離感。わかります？」

あらためて腕をゆっくりと唐辛子へ伸ばし、瓶の上からクレーン車のように指数本で掴んでみせる紗奈に、先輩は「わからん」と頭を横に振った。

「自分じゃ絶対持てない物をクレーンで動かして、大きなビルを建てる。手とクレーンがひとつになるような感覚になりませんか？ 手だけがこんなふうに巨大化して、自分があの高いところに鉄筋の束を積み上げてる感じがしませんか、こうやって」

今度は卵焼きの上に腕を伸ばし、ゆっくりと下ろし、卵焼きを掴む真似をして、それをビール瓶の上にそっと積み上げるような仕草をした。

「うーん、わかんない」

「宇宙まで行っちゃうと、どこへ手をのばして、誰に届けてるのか、ますます分からなくなりそう。もしかして先輩はクレーンと一緒に届けてるって実感がそもそもないんですか？」

「うーん、ない」

紗奈は先輩に聞こえないように「あっそう」と呟くと、卵焼きをお皿の上に乱暴に何個も重ねた。だから先輩がちょっと嬉しそうな顔をしているのに気がつかなかった。誰かが、「たしかに宇宙は遠すぎるよな」と言った。

「ふーん。ま、よくわかんないけど宇宙じゃなくてもロマンありますってことね。いいことだ。けど松田、今建ててんの何よ？」

「タワマン」

「そう、タワマンだよ。四十八階建のタワーマンションですよ！ タワマンなんて、おれたちにはどうしたって手が届かないって。宇宙はもちろん、タワマンにも手が届きませーん」

おどけた先輩のおかげで、宇宙の話がいまいち盛り上がりまず自信喪失気味になっていた隣のご一行も笑顔になった。実はわたしも「あのひと食事中なのにあんなに口を開けて汚いわね」と小言を口にしながらかつて笑っていた。皆の楽しそうな様子も、紗奈の先輩がこの人なのということも嬉しかったのね。ところが、「なに笑ってんのよ。くだらない」と妹に小突かれて紗奈を見た。すると彼女はなんとも浮かない顔をしていた。そしてバッグをむんずと持ち上げるとお手洗いに立った。

「ほんと、手が届かないよ」

誰もいないお手洗いに入るなり鏡を見つめ紗奈は言った。さっきまで甘い卵焼きをほおばっていたはずなのに苦いものが舌に溜った声に、わたしたちは顔を見合わせた。

レバーを握って、モニターを見つめ、風を気にしながら、無線に入る「スラー」の合図に耳を澄ませる。仕事そのものは好き。でも、超高層マンションをつくってもなにか違う。好みで

ないと言え、それまでだけれど、「手が届かない」、まさにそれだった。価格が高すぎるから？ 仕事場として、それとも住まいとして高すぎるから？ どれもじっくりこない。おそらく紗奈こそが、自分とクリーン車で建てた、届けたという実感をもてずにいた。あの建築士と同じだ。どうして実感がもてないのか、きっと彼女自身がいまいち分かっていない。似たようなマンションが次々と建つのは需要があるからだ。でも魅力が分からない。紗奈は本気で先輩に「自分がつくった、届けたという実感があるのか」と聞いたのだろう。そして先輩にも、いくら気持ちちは伝わっていったでしょう。けれど、お酒の席ではそれ以上の会話を求めるのは無理というもの。

そんなことを考えていたら、トイレのドアをボタンと乱暴に閉める音がして我に返った。紗奈は個室へ入るとドアのフックにかけてバッグから、いつもより厚みがあるポーチを取り出した。

このとき、毛糸の姉妹は遅ればせながら、彼女のもうひとつの悩みに気がついた。

日々はしごを昇って地上一〇〇メートルの操縦室へたどり着く。降りるときはもちろんその逆。トイレは操縦室にあるけれど、生理のとき十分な環境かといえば甚だ疑問。わたしたちは理解の仕様もないけれど、あの高所へ昇り降りしながら自分の意思ではコントロールできない生理というものに対応するのはとても難しいように思う。そういえば、瑠衣さんに会ったとき、

婦人科を受診したときのことを色々質問していた。気持ちがいまいちかなく、身体にとってもタワークレーンは高すぎて、手が届かなく、宇宙とまではいかないけれど紗奈にとって遠い存在になりつつあるのかもしれないなかった。

家に帰った紗奈はわたしたちを「東京タワー」に変身させるとそのまま解くこともせずチェストの上に放置し、ベッドでお腹を抱え込んだ。

いつになくふさぎ込む日が続いた。わたしたちは見守ることしかできず、羊だった頃の自分たちに戻りたくなった。どんなに心で思っても毛糸のわたしたちは紗奈に近づいて温めることはできない。たとえ膝掛だったとしても、彼女がわたしたちを手にとってくれなくては寄り添えない。

「タワークレーンへきっかけになったわたしたちを見たくないのかもね」

そんな妹の弱音を聞くと、再び真っ暗な小箱に戻されても仕方がないと思った。紗奈は眩暈がするからと数日間、操縦席に座らなかつた。

久々に紗奈の手がわたしたちに触れた日、彼女はコルクボードに貼っていた自分が建てた渋谷のビルの写真を引き剥がすと、代わりに「東京タワー」に変身したままのわたしたちをピンで留めた。消化できない感情が「東京タワー」の磔刑で楽になるのなら、それも甘受しようと思った。紗奈はときどきこちらを眺めては溜息を吐くばかりだった。

けれど、という風の吹き回しだったのかしら。ある日突然、紗奈は息を吹き返した。はっと思いついたのか、誰かにアドバイスを受けたのか、それともバイオリズムで濃い霧が晴れたのか、ともかくそれは素敵なアイディアだった。彼女は自分自身でタワーマンションがどういうものなのか確かめてみようと思学することにしたの。オフィスビルなら完成時に見学したし、商業ビルなら友達を連れて行って自慢した。けれどタワーマンションへは足を踏み入れたことがなかった。本当に「手が届かない」代物なのか。今後もつくり続けたいと思うのか。誇れるものなのか。自分自身で体感すれば答えは自ずと出る、そう考えたのでしょうか。

「わたしも一緒に行ってみたい」そう何度呟いても気のない素振りをしていたのに、見学当日の朝、紗奈がわたしたちをコートのポケットに入れてくれると「やった！」と大きな声ではしゃいだのは妹の方だった。

高層ビルが乱立するエリアのなかタワーマンションがひしめき合う一角がある。ひととき目を惹くのが四十階超の二つの棟。そのうち一棟に紗奈は携わった。二棟の間には庭が広がっている。てっきり公園なのだろうと思っていたら、なんと贅沢なことにマンション附属のガーデンだった。約束の時間までまだ三十分もあるというのに、心ここにあらずの紗奈は庭を散策することもなくベンチに直行。そしていつもならスマホで時間を潰すのに、このときはポケット

からわたしたちを取り出した。十一月の小春日和、やさしい風があたりの植物を撫でてゆく。色づきはじめたカエデが囁き、シュウメイギクが揺れる花壇、ローズマリーなどハーブのコーナー、シクラメンやクリスマスローズの鉢植えも並び、イルミネーションの準備も始まっていた。

「げ、あれ見てよ。あ、あっちにもいる」

雰囲気全台無しにする妹の声につられて左を向くと、宙に浮く犬がいた。いえ、抱かれていた犬がいた。地面を歩いていない。どれも小型犬ではあるけれど、あっちにもこっちにも、人間の腕にくるまれた犬たちがいた。かつて羊だった頃のわたしたちを追いかけていたのと同じ種類の動物だとは到底思えない。犬種が違っただなんて、そんなの言い訳よ。かつて犬の足の速さに懂っていたという妹はしばし呆気にとられていた。

紗奈も慣れない雰囲気居心地が悪いのか、あやとりといっても何度か指抜きをしただけ。素敵な庭やガラス張りのエントランスへ胸をときめかせているのはわたしだけだった。

そんな胸の内とは反対に紗奈の手の中でだらーんとのびていると、どこから笑い声が聞こえてきた。庭の管理人と思しき男性と小学生の男の子三人がやって来る。男性は、いまどきあやとりなんて珍しいと紗奈に声をかけた。紗奈は男性が持っている箒に気がつく、わたしたちをそれに変身させた。子どもたちは初めて見たのか、「おー」と歓声をあげた。が、ひとり

「なんか違うね？」と生意気を言うから紗奈はむっとした。わたしも妹も、かつて緑の糸でつくったタワーを「ツリーみたい」と評した幼い日の紗奈をこの少年に重ねたわ。

「これならどう？」紗奈が得意気に披露したのはもちろん「東京タワー」。

「すげー！」

三人は自分もやってみたいと騒ぎだし、紗奈はまだ時間があるのを確認してから、わたしたちを少年の一人に渡した。久しぶりのこどもの手は妙に湿っていて土のにおいがした。羊だっ
たとき以来のにおいに妹は、

「こどもって土のにおいがするんだった？　紗奈はどうだったかなあ。この辺に住んでいる子
たちじゃないのかな？」

と空にのびるマンションを見上げた。よく見ると少年の爪には土が入っていた。

三人のうち二人が箒をマスターして騒いでいると、通りがかりの外国人の青年が足をとめた。

彼の国にはあやとりはないのかしら。珍しそうにわたしたちを見て話しかけてくれるのに、少年たちのさっきまでの威勢はどこへやら。英語に怖気づいたのか、わたしたちを紗奈につき返した。そのくせ「さっきのつくってあげなよ」とけしかけた。青年は紗奈が東京タワーをつくるとたいそう喜んで、もう一度つくってほしいと頼んだ。今度は動画に収めたいらしい。

TOKYOのと真ん中、タワマンの狭間の洗練された庭であやとりする女性とそれを囲む少年た

ち。彼にとってはシュールで日本的な光景だったのかもしれない。

彼が“Bye.”と去って行くと、動画の主役「東京タワー」の奪い合いが始まった。「ぼくがやる」「いやおれの方がきつと上手い」騒がしい三十本の指のジャングルにわたしたちはいつの間にか放り込まれていた。小さいとはいえジャングルは鬱蒼としていてむこう側が見えない。淡いブルーのラメが入ったオレンジ色のネイルはどこからも現れない。

代わりに指の間から覗いたのは、スーツ姿の男女とマンションへ入ってゆく彼女の後ろ姿だった。わたしたちが取り合いっこされている間に見学の時間を迎えてしまっていたの。少年たちは紗奈に向かってバイバイと手を振るけれどわたしたちを解放してはくれなかったし、紗奈もこっちを見たのに、わたしたちを連れ戻しには来なかった。

妹は言ったわ。あれはわざとで、わたしたちと決別し、タワークレーンの仕事も辞めることを決めているのではないか、と。それは邪推にすぎないと思う。紗奈は自分がつくったマンションで一体何を感じるのか、多分そのことで頭がいっぱいだった。部屋を借りる気がないのに見学することに後ろめたさもあったかもしれない。だって実際に借りられるほどの資力はないわけだし、昔はウインドウショッピングなんて言葉があったけれど今じゃ耳にすることさえないじゃない。ましてや家だもの、職場の伝手で見学できることになったような気がするけれど、もしかしたら情報を偽って見学までこぎつけたのかもしれない。いずれにせよ、緊張してあや

とりの糸のことは、頭からすっぱり抜け落ちてしまったのだと思う。

だから彼女がクレーン車と力をあわせてつくりあげたマンシヨンのなか、何を思い、何を見たのか、わたしたちは知らない。紗奈とはぐれてしまったことで気が動転したわたしたちは、妹はひたすら悪いように考え、わたしはきつく反論するものだから喧嘩になった。今思えばあれが最後の喧嘩だった。

お互い我に返ったときには、ある少年の右手に巻かれ、あのタワーマンシヨンに向かっていた。少年がエレベーターの前で立ち止まると一瞬ほっとした。妹も同じ気持ちだと、そっぽを向いていても分かった。どこかで紗奈に再会できると思ったから。

けれど想像していた以上にマンシヨンは広く、エレベーターは十基もあった。望みが薄いことは明らかだった。しかも紗奈が見学するのは二十一階なのに、少年が呼び寄せたのは三十階以上にしか停まらないエレベーターだった。さっき庭で目撃した抱えられた犬と一緒にあったのも気落ちに拍車をかけた。もともと、犬がわたしたち羊を指導していたのよ。犬ってそういうお節介な、のんびりとしたわたしたちからしたら、頭でっかちで脚力に秀でた動物のはず。それがここでは道路だろうがエレベーターだろうが、走ることはおろか地に足を着けることなく抱かれている。意外にも犬と気が合った羊の姉さまがこの状況を見たら、どれほど嘆いたことか。マンシヨンの中を汚さないために抱かれているのだとしたら、じゃあ外に出たときは何

のために抱かれているの？　てっきりうちのかわいい子を見てとアピールしているのだと思っ
ていたけれど、抱き上げたとき自分が汚れずにすむように抱いているの？　いまだに意味が分
からない。

四〇〇戸以上あるというのに、人間一人と胸のなかの犬一匹に遭遇したきり、少年は三十五
階でエレベーターを降りると誰ともすれ違うことなく帰宅した。

リビングへ入ると、窓の外、茜色の空が広がっていた。そして本物の東京タワーが見えた。
歪なわたしたちとは似ても似つかないものだった。すこしずつ藍色に溶けてゆく。この少年が
今日のうちに外へ出ることはもうないだろうと思った。わたしたちは紗奈との再会を諦めた。

少年はカーテンを閉めずに眠りについた。時が経つにつれ危なっかしいほどにスタイリッシ
ユになる東京タワーに妹はむかむかすると吐き捨てた。わたしは見惚れた。でも束の間だった。
突然訪れた別れ、それから抱かれる犬たちの有り様から、酷く感傷的になっていたことは認め
る。けれど似たような景色を眺めたであろう紗奈を思うと胸が締めつけられた。

わたしはこの空間に誇りをもつ紗奈を想像できなかった。マンションの内部は想像していた
よりも味気なかった。落ち着いた色味でコーディネートされているエントランスや廊下は、テ
レビで見たことがあるどこかのホテルやオフィスビルと大差なかった。三十五階の東京の夜を

前にすると、より一層そのありきたりさが浮かび上がる。すべてはこの「手が届かない」眺望のためにつくられているように思えた。

たしかに非日常的な空間には違いなしでしょう。

廊下に残るとこのマダムの香水は素敵だった。ロンドンにいた頃、アンティークマーケットから漂ってくる当時すでに廃番となつて久しいフランス製の香りに似ていた。スコットランドの潮風やロンドンのシニカルな香りとは違つて、華やかな幻惑的な香り。それを知るわたしもまた、なんと古いことか。そう思ったとき、紗奈も決して若くないと気がついた。もう三十三歳。高く、もっと高くと求めていたころとは違うのではないか。バイオリズムの変化や不調。わたしたちより時間の流れがゆったりしているはずなのに、人間は変化が多い。この非日常的な景色や香りが、若さと同じように一瞬なら構わない。きらきらした思い出になる。けれどこれが毎日続けばぎらぎらした悪夢とそう変わらない。

自分とクレーン車がつくり上げたのはこのぎらぎらする毎日。それなのに自分たちで届けた実感は伴わない。決して「手が届かない」。紗奈の目標は高いところから、手の届くところに変わりつつあるのではないか。東京タワーが今では日本一高いビルではないように、これからの彼女の「東京タワー」は別にあるのではないか。

そこまでで考えるのをやめた。もう会えないというさみしさに感じて、お節介なお婆さんに

なりつつある自分に気がついた。わたしだって見惚れたというのに、紗奈がこの空間に魅了されなかったとどうして言えるの？ 「東京タワー」とは似ても似つかない端正な二等辺三角形をじっと見続けている妹の隣で、わたしは感じたきらめきも悪夢も、ましてや老婆心など口にすることなくそっと目を閉じた。

次の日もその次の日も、わたしたちは机の上に放置された。

部屋には円盤が現れることがあった。わたしは、これこそが故郷で密やかに噂されていたストーンサークルに時折姿を見せるという宇宙からの円盤ではないかと怯えた。ところがこの円盤は宙を進む犬とは逆で、本来空を飛ぶはずなのに床を這いずり回っている。高所ではこうした逆転現象が起こるのかと、恐ろしいのに目を離せずにいた。妹はこう断言した。

「わたしたち、そのうちあれに吸い込まれるよ」

この命もついに果てるのだ。いまや人間は空の中に住み謎の円盤と共生するようになり、わたしたちはそんな奇怪な存在に吸収される。

「そんな最期、わたしは嫌よ。せめてごみとして捨てられたい」

「じゃあ問題ないじゃない。あれ掃除機だもん」

妹は自動で動く円い掃除機のことをずっと前にテレビで見かけていたんですって。「お姉ちゃん、危機管理能力低いものね」と笑われた。わたしたちはなにかの拍子で床に落ちたら、

「はい、そこまで」だった。

少年の家に来て四日目の朝、起きて早々どこかへ姿を消していた少年は突然部屋に戻ってくると、机の上に放り投げていたわたしたちをつかんで大声で母親のもとへ走った。外国人が撮った動画をネット上で見つけたのだという。再生回数四〇〇回は彼にとっては大変な数字だった。動画はわずか六〇秒で、紗奈があやとりしている姿に高層ビルがオーバラップし、肝心の少年たちは最後に一瞬登場するだけ。ところが彼にとっては自分が世界に発見されたに等しいのね。動画を見つけたときの驚きようといったらすごかった。飛び跳ねて叫び、高所の住人だけあって耐空時間はなかなかのものだった。わたしたちを持つ興奮した手には熱気がこもり、なぜかまたもわっと土のにおいがした。彼はもう片方の手で握るスマホをお母さんへ見せ、ネットのなかに自分がいることを早口で説明した。「見てよー」と叫ぶ息子に母は「あとで。それより病院行くから早くしなさい。今日おばあちゃんの手術でしょ。学校休むからって朝から遊びに行っていていいわけじゃないよ。ほら、手が汚れてるから早く洗いなさい」とスマホを取り上げ自分のバッグへしまった。

地上一三メートルから、口をとがらせた少年の手のなか、ほのかな石鹸のかおりに包まれて揺さぶられ、地上へ降りると秋と冬の境目のひんやりした空気が待っていた。

病院はマンションと高層ビル群の間にあった。自動ドアが開くと、色んなにおいが体によそ

わりついた。病院ごとひっくり返して丸洗いしたいのに、それができないから強力な消臭スプレーで覆われているようなもどかしいにおい。歓迎はできないけれど次第に慣れてしまう。かつてのご主人が入院したとき、靴下やショールとして付き添ったときとおなじだった。けれど今回は少年の小さな手が守ってくれる。

そう思ったのに、結局、置いて行かれた。

大人が神妙な顔をして手術が無事に終わるのを待つ間、少年はあやとりで遊ぶとした。ところが触るのはあの日以来な訳だから、一度は出来た「箒」でさえあやふやだった。いつもなら妹が「下手くそ」とか「痛いなあ」とか小言を口にしそうなものののに、四〇〇人に視聴されたという動画を目にしてから、わたしたちの口数はぐっと減っていた。久々に目の当たりにした自分たちの姿は、想像より遙かに老いていた。ぼさぼさで艶のない毛。赤は褪せ、白は薄汚れ、かつてショールに転生したころの鮮やかさはどこにもない。今にも散ってしまいそうに脆く、誰かを温める力などどこにも残っていない。

だから置き去りにされたからといって、憤慨する必要などないことはよくわかっていた。それに、ストレッチャーで病室へ向かうおぼあちゃんに誰よりも早く駆け寄った少年がわたしは好きよ。双子糸のおぼあちゃんは忘れられるくらいでちょうどいい。

窓の外に黄色い葉を揺らすイチョウがあった。信号待ちをする人はコートの前を重ね、たま

らず襟を立てる人もいた。ストールも揺れる。三階からの眺めだと季節がわかる。人の流れがわかる。これくらいの高さが親しみやすいのは、耳も目も衰えてきたからで、紗奈や少年たちには二十一階だろうが三十五階だろうが、高ければ高い方が魅力的なのかもしれない。そんな自虐的なことばかり考えて見下ろしていたら、突然目の前が真っ暗になった。

今度こそ捨てられると覚悟した。ところが、寿命はまだ残っていた。

拾ってくれたのは、あと三日後に閉店を控えていた病院の地下にある売店の店主の美佐子さんだった。あの日の閉店後、なぜか彼女は3階にいた。ふとフリースペースの方を見ると窓の外、色づいた樹々が綺麗だった。写真を撮ろうとやって来て、窓際のソファーに残されたわたしたちを見つけた。不意を突かれたわたしたちはなにも気がつかなかった。多分、彼女のコートのポケットに入れられた。……いいえ、真っ暗なポケットのなか、どこかへ移動していると気がついた。けれどゴミ箱行きという現実を受け入れたくなくて目をかたく閉ざしていたの。そして、眠ってしまった。

次の日、寝ぼけ眼でぐるぐると体操させられていることに気づいて慌てて周囲を見渡すと、不思議な場所にいた。美佐子さんの手で「橋」になったわたしたちの向こうには、さんさんと太陽がきらめく中庭があった。けれど正面以外は薄暗くて人気ない。庭といっても、マン

シヨンの庭とはまるで別物で、長方形の狭いスペースにひょろりとした木が何本か生えている自然まかせの庭。花の不在を、赤くなった実、そして濃い青になろうとして白から紫に遊んでいる小さな実がささやかに補っていた。みんなをうっとりさせる庭ではなく、誰かを慰めるための庭だと感じた。売店は中庭に面していて、美佐子さんの定位置は店の真ん中にある椅子。その向かいの長椅子に、ときどき掃除のおばさんや看護師さんがやって来ては美佐子さんとお喋りを楽しんだ。薄暗い地下でも、陽が射すときれいだったし、長椅子に座れば背中がぽかぽかするそうよ。きつと雨の日は雨だれをぼーっと眺めるのも悪くなかったでしょう。

みんな話が長いから、わたしたちは美佐子さんと売店のことを断片的に知ることができた。昔、美佐子さんの父親が病院の近くでたばこ屋をやっていた。よく通っていたのが、今はもう自宅で静養中の齢八十二の理事長、当時は外科長だった。ある日、彼はいつものようにせわしく一服すると、今度院長になることが決まった、これまでのように喫煙者ではいられなくなると笑い、病院のそばにたばこ屋があると謂われのない批判を受けるかもしれないから、今度の病院改築を機に病院で売店をやらないか、いや、やって欲しいんだ、お願いねと誘った。今なら非難されるかもしれないけれど当時中学生だった美佐子さんは店番をすることもあった。煙草を吸っている父と医者の手を見比べるのが好きだった。店番は専ら妻や娘にまかせ、宅配業もやり、知り合いの店が移転するとなれば積極的に運搬を手伝う父の無骨な指と、心臓の血

管手術が専門だという医者 of 長い指はまるで違った。バイオリンが得意だと聞くと、美佐子さんの耳にはその音色が自然と耳に流れたほど、煙草から灰をトンと落とす仕草さえ優雅だった。医者は気まぐれに上等な折り菓子を持ってきてくれることがあった。美佐子さんには中身よりも嬉しいものがあつた。箱に結んである紐やリボンで花や魚をつくる。美佐子さんはそれを見るのが大好きだった。

その後店はスーパーへと路線変更し、病院の売店も始めた。結婚し専業主婦となつていた美佐子さんだつたけれど、繁盛するのに並行して老いはじめてきた両親を手伝うようになり、六年前には美佐子さんが店主となつた。コンビニの参入により閉店の危機もあつたけれど、古参の医師や看護師からの声援で残留できた。とはいえ一階のコンビニに勝てるはずがなく、売り上げは落ち込み、病院の改修工事の話が持ち上がったところで閉店することを決めたのだつた。早々とセールを始め、もうたいした物は残つていない。あつても困らないポケットティッシュの類はすぐに売れたし、手軽に食べられるお菓子もあつたという間になくなつた。数日前から弁当やサンドウィッチなどの仕入れはストップさせて、残つてゐるのはカップのお汁粉、コンタクト用のケースと保存液、鯖の缶詰、大き過ぎる爪切り、あとはゼムクリップ等。すでに大きな什器は運び出し、レジもない。事務室から借りてきたワゴンに残りわずかな商品を入れ、

折りたたみテーブルには小型金庫、電卓、トレー、ラジオ。

「今はなにも思わないけど、全部を撤去してここががらんとしたときにはさみしくなるのかしら」

美佐子さんが笑うと、訪ねてきたどの人も今の時点ですでにさみしくてたまらないと訴えた。

「ところでどうしてまた、あやとりなんてしてるの？」

「昨日ね、三階のフリースペースで見つけたのよ」

「ずいぶん年季入ってるじゃない。ここなんて今にも切れそうよ。あ、こっちも」

「届けた方がいいと思う？　まさかね。忘れ物にしては汚いよね。なんか懐かしくて遊んじゃってるの」

間もなくその日の閉店時刻を迎える午後三時五〇分、若めの医者がやってきた。彼は店の様子が変わっていることに驚いたのか、それとも椅子に座ってあやとりをしている美佐子さんを不審に思ったのか、首を突き出して眼鏡の奥の目を瞬かせた。

「いらっしゃい。ごめんね、何もなくって。明日でここ閉めるのよ」

立ち上がった美佐子さんに、彼は知らなかったと呟いた。黙ったまま動かない彼に美佐子さんは「一階に行けば色々売ってるでしょ」と助け舟を出したのだけだと、「いや。そんなこと、全然」とよくわからない態度。立ち去る気配がないから店の後片付けを始めることもできずに

座りなすと、彼も向かいの長椅子に埋められるようにして座った。体が沈むような柔らかいソファでもないのに、「はぁー」と溜息をついて、当分立ち上がることができない様子だった。

そんな彼を美佐子さんはわたしたち「富士山」越しに盗み見る。三〇代半ば。思ったより若くないかも。色白で華奢。眼鏡がずり落ちているのに調整していない。結婚指輪あり。「何科の先生か当ててみるね。整形じゃないでしょ。脳外はない。小児科も違う。あとは――」

「心臓外科しんざんげです」彼ははっきりと言った。ところが「遅いお昼買いに来たんじゃないの?」と聞かれると、

「弁当に何か足そうと思って。でも、いや、なんか食べなくてもいいかって気もしてきたというか……」

と、さっきまでのうじうじした口調で答えた。「今度の休み、焼肉でも食べに行きなさいよ」と美佐子さんは活を入れ、ワゴンの中身が見えるように先生の前へ移動させた。が、相手は「焼肉なんてでんで食ってない」と天井を見上げたままワゴンにはまったく気がついていない。呆れた美佐子さんは「上にあるコンビニかカフェでたらふく食べないと気力出ないよ」と笑ったのだけれど、「いやあ、それはいいです」と無気力にますます椅子に沈み込んだ。買う気配はもとより、商品を見るわけでもなく、むしろ閉店作業を邪魔されているのにこちらが気を遣ってしまう。うんざりした美佐子さんはワゴンに両手をついて立ち上がった。

「明日で店じまいなんだから、なんか買ってつてよ。在庫処分、手伝ってちょうだい。お汁粉、温まるよ。なんでか人気ないけど。眼鏡だもん、これはいらないでしょ。それから……『ロシアンルーレットができるグミだよ』ってなんだろうね、これ。ミステリー味だつて。いいんじゃない？ 先生にびったり。魚の缶詰は買わないだろうけど、あとは——」

「なんの缶詰？」

「鯖缶。サバの水煮」

「買います」

医者は勢いよく立ち上がると白衣のポケットからスマホを取り出した。すると美佐子さんは申し訳なさそうな顔をし、相手も同じように頭を下げた。美佐子さんは在庫処分だからお代はいらないと伝えたが医者は現金を取って来ると言って聞かない。

「早く帰りたいんだけどなあ」とほとんど本気的美佐子さんへ、「四時迄でしょう？ 五分もかかりませんから、ちょっと待ってて」と【→売店 営業時間 九〜一六時】と書かれた壁の掲示を指さしながら階段の方へ走っていった。

彼は五分も経たずに戻って来た。千円札を差し出しながら、もう片方の手でずれ落ちた眼鏡を元に戻した。

「先生どこで缶詰なんて食べるの？」

「普通に部屋で」

「えーっ魚臭いじゃない。患者さんからのリクエストで少しだけ置いてたんだけど、ときどき苦情あったのよ。臭いから置いてくれるなって」

「ぼくたち結構食べるんですよ。家からごはん缶詰だけ持ってくることもありましたよ。子供の頃、家族にDHA、DHAって言われて、魚の缶詰から逃れられない奴って結構いるんですよ。青魚食べときゃいいだろうって。最近は鮭の方がいいって聞きますけどね。と言っても勉強と仕事じゃ違うんですけど、まあ、そこは……」

美佐子さんがお釣りを渡そうとすると先生は拒否した。受け取れ、いや受け取らないとひと悶着が始まった。

「僕、この病院での初日、最初に連れてこられたのがここだったんです。当時は理事長先生がお元気で、挨拶回りに行くぞと引っ張られまして」

突然美佐子さんが大きな声を出した。

「あ！ 思い出した。もしかして理事長先生に久々のルーキーって紹介された、あのときの先生？」

「そうです。そいつ僕です」笑うとまた眼鏡がずれた。ずれたまま先生は話を続けた。いつもならカフェで甘い飲み物を買うか、コンビニで総菜を買うかの二択のところ、理事長先生を思

い出すことがあって久しぶりに地下へやって来た。そんな話を聞くうち、結局美佐子さんが折れて千円を受け取るようになった。その判断に満足した先生はあまりに勢いよく頷いたので、眼鏡がさらにずれた。

わたしたちはテーブルの上から二人の様子を黙って眺めていた。橋だ、富士山だと体操してくたくたになってしまい、ときどきずれた眼鏡越しに物珍しそうな視線を向けられることに気がついていたらけれど、「あら、何かしら？」と流すことしかできなかった。妹はよほど疲れたのか半分眠ってるようだった。

「これ、理事長先生が反応しそうなんだよな」

そう言うと、先生はわたしたちをてのひらにのせた。妹はびっくりして目を覚ましたけれど、間近にある彼の目がつこりと優しいから、すぐに落ち着いた。

「理事長先生って変わってますよね。カンファレンスのとき、どこから持ってきたのか分からない紐で星とか雪の結晶をつくってたんです。でも誰も注意できない。話はちゃんと聞いてるから」

「あれ、癖みたいよ。昔ね——」

二人はしばらく思い出話に花を咲かせたようだった。楽しそうに笑う先生を見て、久しぶりに誰かを喜ばせることができた嬉しかった。でもこのときのわたしたちにはもう、二人の会

話にすっかり聞き耳を立てるだけのエネルギーが残っていなかった。それに先生の手はなんだか心地よくて、うとうととしてしまった。

「やっぱり流行ってるんだ」

去り際、先生はそう言った。なにがと美佐子さんが尋ねると、あやとりだという。なんと仕掛け人は少年が大喜びした例の動画らしい。先生の話によるとこうだ。まず、間もなく始まるタワマン庭のイルミネーションの検索数が上昇した。すると、庭つながりであの動画がピックアップされ、閲覧数も跳ね上がった。すると今度は、似たようなあやとりのチャレンジ動画の投稿が相次いだ。それで現在、若い子のあいだであやとりが流行中。

美佐さんが「それ、あげようか」と尋ねると、先生は「流行りには無頓着なので」とあっさり拒否した。そしてわたしたちを笑顔で見つめたまま美佐子さんへ手渡すと、来たときと同じような溜息をつき、「最新技術を取り入れるのと、理事長先生みたいにアナログに技磨くの、どっちがいいんでしょうね」と口にした。わたしには美佐子さんへの質問というより先生の心のなかが思わず飛び出した、切実な独り言のように聞こえた。

「わたしがこれから売店を開くならスマホ決済も導入するわね。で、空いた時間に編み物をするわ。ぼーっとしたいときは中庭を眺めてあやとり。若かったらあれもこれも欲張るな」

美佐子さんの堂々とした口調に先生は笑いながら、ずれていた眼鏡を戻した。

その日の営業を終了すると美佐子さんはしばらく中庭を見つめていた。

コートのポケットに仕舞われ、美佐子さんと一緒に病院を出る頃には五時を過ぎていた。空には暗い雲が集まり、風は強くなっていた。

「あ、美佐子さん！」

急ぐ彼女の背後から呼び止める声があった。二人は話し始めたのはよいものの、コートのポケットのなかまで冷たい風が伝わってくる。

「うー寒いわね。来週、そのイルミネーションを見に来るつもりなの。立ち話もなんだし、そのときにでもお茶しましょうよ。いつにしようか……」

薄地の手袋に包まれた美佐子さんの手がポケットに滑り込んできて、わたしたちはスマホと一緒に持ち上げられた。

そして、空中で落ちた。

美佐子さんは気がつかない。コンクリートの地面に音もなく落下したわたしたちに気がつく人はいない。せめて犬でも通ってくれたらと思ったけれど、ここの犬は宙を進む。あの少年も、もちろん紗奈が通ることもない。

わたしたちは病院の三階から眺めたあのイチヨウの下を風に吹かれて通り抜け、瞬く間に美

佐子さんは遠くなった。実がない雄木だった。実が転がっていたとしても、あのおいを吹き飛ばすくらいに強い風が吹く。老いた双子の糸には、もう言葉も交わす気力も残っていないかった。微笑み合うだけ。必死につないでいる手も次第に擦り切れ、みるみる痩せ細ってゆく。

ようやく枯葉のたまり場で一息ついた。黄金色のイチヨウの葉がケープのように風から守ってくれた。ほっとしたわたしたちは顔を見合わせ、「あー疲れた」と同時に言った。それが最後の会話だった。突如赤い疾風がやって来て、ついにわたしたちの手は切り離された。かつて林檎のようにまるかった妹は、一度赤い枯葉と混じってしまえば双子の姉でさえも見分けることはできなかった。それだけこの目も衰えた。

別れはいつも唐突ね。たった二日前のことなのに、もっと昔のことのように思う。生まれてはじめてひとりになったからかしら。それからの時間はあつという間に過ぎた。ひとりは自由で、素敵で、予想していたよりさみしくなかった。ひとりだから、いつも隣にいた赤い妹や、いくつもの温もりを思い出した。ここまでの道のりをつなげるには、一体何個の毛糸玉が必要だろう。そんなことを考えるうちに眠ってしまい、風の音で起こされるのを繰り返した。

今、優しい風が吹いている。けれどわたしが軽すぎて、高層ビルの狭間でどんどん高く吹き上げられる。わたしがタワーマンションからの景色にしばし見惚れたことを、この風は知って

いるのかしら。これまでにないくらい高いところへ連れて行ってくれる。またひとつ建設中のビル。地上四〇メートルというところ。高さには随分詳しくなった。そこからまた高く舞い上げられた。あっちでは屋上に何かを建てている。懐かしい。紗奈と妹と一緒に見た、タワークレーンからの景色みたい。もう時間なんかわからない。

突然風がやんだ。一気に落とされる。頭がくらくらする。ああ、ここは病院の中庭だわ。売店は、もう、ない。小枝に絡まろうと手をのぼそうとしても、短い繊維となったわたしはそれができない。濃い青に輝く実を見つめ、わたしは再び風の螺旋階段を駆け上がる。とてもかろやかに、息を弾ませることなく瞬く間に駆け上がる。自分がどんどん小さくなってゆくのが分かる。何度も変身した赤と白の東京タワーが遠くに見える。

陽が翳ってすこし寒さを感じる。まあ、こんなに色々な手がつつんでくれるのね。バリカンの刃の冷たさと人間の手の温かさ。初めてご主人の体を温めたときのこと。編まれる手指のからくり。羊の姉さま。潮とウィスキーの風。大都会の風。香水、土、草、マニキュア、そして人間のおい。色々が思い出されながら、さらに高く舞い上げられる。

たった一瞬だった。どこかのクレーン車の操縦席に紗奈がいた。前よりも少し小ぶりのクレーン車だ。妹に報告しなきゃ。でも横を向いても妹はいない。十二月の空、白い糸が舞っている姿が心に浮かぶ。きっと人間の目には映らない。

雪がはらはら降ってきた。多くの手に絡めとられ、引き寄せられ、つつまれ、そしてつつんだこの旅路も、今、終わろうとしている。雲だったわたしは雪となり、みんなが待つ地上へと降りてゆく。

双子の糸の物語

二〇二六年二月二十七日 発行

著 者 菅原侑子

発行所 コッコ文庫

<https://kokko-books.com>

装丁 製本
DTP
コッコ文庫

© 菅原侑子 2026





